'I am a cat' class 思い付く事など(4)

Junko Higasa

リズムとテンポ

恋と緊張が胸の鼓動のテンポを上げたとしても、人間は誰しも「一定のリズム」を持っている。そして人それぞれに異なった「生きるテンポ」を持っている。心地よいと感じるリズムはDNAが支配し、体に馴染むテンポは先天的性質と環境によって育まれた後天的性格が支配する。よく「馬が合う」というが、それは物事に対する具体的な好みが合うこともあろうが、まずテンポが合うのだと思う。人間いざとなったら呑気な人も奮起して素早い行動を起こすものであるが、日常の中では短気と呑気は互いに補い合いながらも時々すれ違う。これは調整しても融合できる性質のものではない。それは人間の付き合いばかりでなく、本との相性にも言えることだと思う。

そこで漱石の文章について考えてみた。私には読もうとしても読めない本がある。それは言葉の流れに心地よいリズムもテンポも見えない角ばった言葉で綴られている本だ。努力しても文章が頭に入っていかず、ボーっとして何が何だか分からなくなって読みやめる。その反面、豊富なヴォキャブラリーで綴られた流暢な文章は、驚くほど速い速度で読める。文字の大きさや行間の広さの差はあるが、もう全体の 2/3 を読んでしまったから相当時間がたっているだろうと時計を見ると、まだ30分しかたっていなくて驚いたことがある。もっともそれほど速く読めるのは少々気楽な本であるが、内容に引き込まれてテンポよく読めれば、数時間で読み切ることは少なくない。

さて、私が夏目漱石の小説を読んだときには、まずそこにある美しい流れに魅了された。山脈のごとき起伏ではなく、おだやかな川のごとき揺らぎである。そしてその流れの中にテンポよくモダンな言語表現が浮かんでいて、さらに想像力をかき立てた。漱石の鋭い観察眼による描写は、そのまま絵に描けるほど細部にわたり事実を描写している。すなわち自分がその景色の中にいるように引き込まれ、その中の人となって考えることが可能なのである。それというのもリズムとテンポのバランスが良いからではないかと思う。つまり読みながら途中でつまずくこともないし、長らく立ち止まることもない。時折ちょうど良い息継ぎがあるだけである。それから言葉の使い方。もちろん学術論文ではないから専門用語で埋め尽くされることはないが、まず才能のある人は難しい言葉を得意気に羅列することはなく、やさしい言葉に美しい着物を着せてしなやかに歩かせる。時に交響曲のように勇ましかったとしても、文章のテンポやリズムを崩すことなく、感情を高めたり鎮めたりする言葉をつなげてエンディングに持ち込み余韻を残すのである。言葉も音である。美しい流れは音の配列に起因する。

それからまた、私は漱石の書いた雑篇の英文を見て表現が美しいと思った。それこそ「I love you」に「月がきれいですね」という意訳を当てた如く、言い回しがきれいなのである。英語においても漱石の言葉の流れは美しい。

漱石の文章のリズムは謡や落語のようである。そしてテンポは優秀な学者の熟慮と即断の結合である。さらに美しい日本語表現は、短い中に多くの意味を込める漢詩・俳句で培われたものである。ヴォキャブラリー（語彙）が豊富であったとしても、リズムを保つために無駄な言葉を切り捨てる度胸がなければ美しい表現は成り立たない。雑音を省きクリアな音で構成する漱石の文脈は心地よく耳に響いてくる。(2012.2.21)